立ちのぼる生命（いのち）

宮崎進展

上

死の風景にとどまらず

生命のメッセージ

シベリアでの抑留経験などを主題に、さまざまな素材を駆使した絵画や彫刻作品に取り組んできた鎌倉市在住の宮崎進（92）。「立ちのぼる生命」と題して県立近代美術館葉山で開催されている個展の見どころを3回にわたって紹介する。

◇◇

今回の宮崎進展は、会場全体をあたかも一つの作品のように展示しようとする試みである。もちろん初期の作品もあれば、スケッチブックやエスキース（下絵）などの創作の秘密を教えてくれる資料類もふんだんに展示されている。しかし、エントランスに設置された、高さ3㍍を超える初公開の彫刻の大作、展覧会と同名の「立ちのぼる生命」（2003年）から、最後に展示される宮崎の言葉「虚空に浮遊していたいのである。」（02年、「13の言葉」から）に至る全てをひっくるめて一つの主題が浮かび上がるように綿密に計算されているのである。

惜しみなくあふれでる「生命」。会場を後にした人は、その息吹に全身を包まれたような印象を抱くのではあるまいか。

例えば、会場の最も天井が高い第3展示室。手前の空間の中央に、彫刻「横たわる」（01年）がごろりと床に置かれている。両脇の壁には、04年と08年に制作された二つの「花咲く大地」が飾られている。一見奔放と感じられるコラージュの大作が、共通のデッサンに基づいて構想されていることがはっきり分かる。とはいえ、大地そのものがそうであるように、機械的な反復からは縁遠い、いかにも自然な変奏の妙をそれらは湛えている。

奥の空間には、やや低い位置に「泥土」（04年）が掛けられている。宮崎は、この作品をサンパウロ・ビエンナーレで発表するために描きあげたとき、私のインタビューに答えて、この大作が戦争で体験した〝死の風景〟であることを説明してくれた。そこには動物や人間の死体や骨が混ざり合ったぬかるみが表現されていたのである。

驚くべきことに、当時80歳を超えていた宮崎は、この前段で、もう一枚「泥土」を描いていた。大きさとやや明るみを帯びた茶色のバージョンに満足できずに、もっと深刻な暗緑色で、より大きな寸法の新作を描いたのだ（本展にはこれら2点の「泥土」が展示されている）。

床に置かれた彫刻「横たわる」が、母親であると同時に嬰児であり、また、硬直した死者のようにも感じられる多様な意味を今回の展示で与えられたように、一連の「泥土」も、〝死の風景〟にとどまらない、新たな生命を育む沃土という性格が、今回の展示によって浮かび上がってきた。それは21世紀の困難な時代にあって、画家がいま振り絞るようにして私たちに伝えようとする生命のメッセージゆえではなかろうか。

（県立近代美術館館長・水沢　勉）

＝次回は13日

「泥土」（2004年、県立近代美術館蔵）

第3展示室。床置きの彫刻「横たわる」（手前）の先に「泥土」が見える＝県立近代美術館葉山（山本糾撮影）

◆「立ちのぼる生命　宮崎進展」は、県立近代美術館葉山で6月29日まで。月曜休館。一般900円、20歳未満・学生750円、65歳以上450円、高校生100円。5月17日午後2時から、水沢館長による記念トークあり。18日は無料開館日。問い合わせは同館☎046（875）2800。

2014年（平成26年）5月13日　火曜日　神奈川新聞

立ちのぼる生命（いのち）
宮崎進展
中

孤独を求め 虚空に浮遊

格子の向こう

会場に作品を展示していて実感したのは、宮崎進に抽象絵画はないということである。抽象化された作品はあっても、その背景には必ず具体的なイメージがある。

5章立ての会場。第3章の中ほどに、通路を挟んで並べた二つの「花咲く大地」（2000年、東京ステーションギャラリー蔵／04年、県立近代美術館蔵）は、黒い斑点の配置から同じモチーフを描いていることが明らかであり、遠近感さえ感じられる。見慣れてくると、左右2枚のパネルから成る「黄色い大地」（00年、新潟県立近代美術館・万代島美術館蔵）にも、黒い斑点で構成される輪があり、麻布の複雑な褶曲を見せる左側から、平たんな右側へと空間が広げられているように見える。実際、パネルの裏を観察すると、右側のパネルは必要から急いで作られたらしいことがうかがえる。

この作品に衝撃を覚えるのは、粗い麻布のひだをまたいで、あたかも絵の表面のさらに上の空間に刻まれているような縦横の線に気付くときである。それは構図を決めるための補助線などではない。長い冬を経て、永久凍土の表面に一斉に芽吹いた草花がシベリアの大地を黄色く染める様子を描写した上に出現した格子である。そう、これは収容所の有刺鉄線なのだ。このとき、この作品を観る者は、捕囚と同一の目線に立ち、有刺鉄線越しに黄色い大地を眺めることになる。

最初の展示室（第1章）の正面に見える「立つ人」（06年、伊勢現代美術館蔵）にも、同じ壁に並ぶ「漂泊するもの」（1992年ごろ、作家蔵）にも同じような格子が描かれている。それらは、最後の展示室に置かれた二つのドライポイント小品「捕われた人」（いずれも60年ごろ、作家蔵）を見れば、「黄色い大地」とは逆の視線から有刺鉄線越しの捕囚を描いていることが理解できよう。

そして、第1章の冒頭に展示した「冬の鳥」（93年、周南市美術博物館蔵）。画面の縦横に貼られた紙テープの意味も、もはや言うまでもない。シベリアの冬空に舞う一羽の鳥、それがいかに厳しい自然環境の中で孤独であろうとも、少なくともこの鳥は自由なのだ。

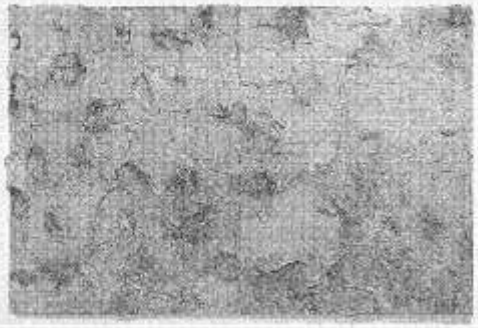
宮崎進は語る。「私が私でありたいと思うとき、私はすべてを捨てて孤独を求める。はるかな空や、海原を漂う鳥になりたい。虚空に浮遊していたいのである」（94年、「13の言葉」から）

（県立近代美術館主任学芸員・籾山　昌夫）

＝次回は16日

◆「立ちのぼる生命　宮崎進展」は、県立近代美術館葉山で6月29日まで。月曜休館。一般900円、20歳未満・学生750円、65歳以上450円、高校生100円。5月17日午後2時から、水沢勉館長による記念トークあり。18日は無料開館日。問い合わせは同館☎046(875)2800。

「冬の鳥」（1993年、周南市美術博物館蔵）



「黄色い大地」（2000年、新潟県立近代美術館・万代島美術館蔵）

2014年（平成26年）5月16日　金曜日　神奈川新聞

立ちのぼる生命（いのち）　宮崎進展　下

レクイエムと生への賛歌

花咲く大地

本展は五つの章で構成されている。第3章は、章のタイトルにもなっている「花咲く大地」と題された、制作年と所蔵の異なる3点が展示されている。それらは主に赤と黒に彩色されたドンゴロス（コーヒー豆などを入れる袋に使われる粗い麻布）が、画面全体に貼り付けられているという点が共通しているが、細部を見ていくとその豊かな変奏に気づかされる。

2004年のサンパウロ・ビエンナーレ出品作「花咲く大地」（県立近代美術館蔵）は、沈んだ色調の赤と黒の麻布が画面を覆う。麻布は麻の繊維から作られたオーガニックな素材であり、規則正しく並ぶ織り目はセルの結合を思わせる。麻布の端がほつれ、けば立ち、糸が垂れ下がっている様子は、菌糸状に増殖、あるいは壊死していく、何か原初的な有機体の一部のような様相を帯びている。

ドンゴロスという素材と宮崎進との出会いは、シベリア抑留時代へとさかのぼる。ソ連と満州の国境守備隊の兵士として終戦を迎え、シベリアの収容所に送られた宮崎にとって、1949年まで続く過酷な抑留生活の中で、絵を描く材料として身近に手に入ったのが穀物の入った麻袋だった。「私はこの布に特別の愛着と、何よりも物質としての存在感や材質を超えた不思議な生命のようなものを感じるのである」（95年、「13の言葉」から）

2008年の「花咲く大地」（東京ステーションギャラリー蔵）は、赤がより一層鮮やかだ。そして12年の「花咲く大地」（周南市美術博物館蔵）はさらに赤の透明度が増し、黒い部分を覆っていくかのように広がる。細部に目を凝らすと、まるで氷が解けだしたかのような輝きが見えてくる。宮崎は油絵の具に方解末（方解石の粉末で日本画によく使われる岩絵の具）を混ぜることがあったといい、その輝きだろうか。それは生命の萌芽のきらめきを思わせる。

シベリアで体験した圧倒的な死と生について、宮崎はこう述べている。「冬のあいだは零下70度にもなるシベリアの土地はまさにツンドラです。（中略）それが、春が訪れると、その氷のあいだから、小さな花が芽吹いてくるのです。（中略）万物が、人間も含めて、一気に蘇り、命を吹き返すのです。人間と自然の死と生命の劇的な存在の仕方をわたしはシベリアで感じ取ったのです」（Voxes da Sibéria SHIN MIYAZAKI 04年、日本語版から）

3点の「花咲く大地」を制作年順にたどると、大地にまかれた死が生へと花開く様を目にするようである。宮崎作品に通奏低音のように流れる死へのレクイエム、そこに重ねられる旋律は生への賛歌であり、一連の「花咲く大地」はその二つの重奏である。

（県立近代美術館学芸員・土居　由美）

「花咲く大地」（2004年、県立近代美術館蔵）

会場風景。第3章の冒頭を飾る2012年の「花咲く大地」（右端）＝県立近代美術館葉山

◆「立ちのぼる生命　宮崎進展」は、県立近代美術館葉山で6月29日まで。月曜休館。一般900円、20歳未満・学生750円、65歳以上450円、高校生100円。5月17日午後2時から、水沢勉館長による記念トークあり。18日は無料開館日。問い合わせは同館☎046(875)2800。

（C）神奈川新聞社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します。